

# 那珂 49

—那珂遺跡群第113次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第982集

2008

福岡市教育委員会

NA KA  
那珂 49

—那珂遺跡群第113次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第982集



遺跡略号 NAK-113  
調査番号 0618

2008

福岡市教育委員会





調査区西側全景（北から）



谷(SX41)土層断面（北から）



## 序

福岡市では北方に広がる玄界灘の海を介し大陸と人、物、文化の交流を絶え間なく続けてきました。この地の利を生かした人々の歴史を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれ明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術や文化を示す貴重なものが多く、学術研究上、各時代とも重要視されているところです。

本調査地点は弥生時代において、「奴国」の拠点の一つとして全国でも特に繁栄を極めた那珂遺跡群に含まれています。今回、遺跡群の東端を調査し、集落が立地した台地が落ちていく形状とそこに残った自然遺物や廃棄された遺物などから自然環境や集落の変遷の一部が明らかになりました。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく、多様な開発で消滅する埋蔵文化財について実施した記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力いただいた明永美智子様、株式会社エムシーコーポレイションをはじめ関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成20年3月17日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

## 例　　言

- 本書は福岡市博多区那珂2丁目37番、38番地内において福岡市教育委員会が2006年度に実施した発掘調査報告書である。
- 調査費用には受託費のほか個人事業として国庫補助金を充当した。
- 調査は荒牧宏行が担当し、遺構図面は荒牧が大庭友子、高手興志子、濱フミ子の補助のもと作成し、遺構写真撮影は荒牧が行った。
- 本書に掲載した遺物実測は濱石正子、相原聰子、荒牧、淨書は濱石正子、大石菜美子、相原聰子、荒牧、遺物写真撮影は荒牧が行った。
- 本文は荒牧が執筆、編集した。
- 本書掲載の実測図、写真、遺物のほか調査で得られた全ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管され、公開・活用されていく予定である。

## 凡　　例

- 本書掲載の遺構図座標、方位は旧日本測地系（第II系）による。方位は真北より $0^{\circ} 19'$  西偏する。
- 掲載した遺物は土器、石器、金属器等の各種別に通し番号を付した。

遺跡調査番号	0 6 1 8		遺　跡　略　号	NAK-113	
地　　番	博多区那珂2丁目37番、38番		分布地図番号	板付 2 4	
開　発　面　積	1 9 6 1 m <sup>2</sup>	調査対象面積	4 2 9 m <sup>2</sup>	調　査　面　積	3 7 2 m <sup>2</sup>
調　査　期　間	平成18年6月5日～8月1日				

## 本文目次

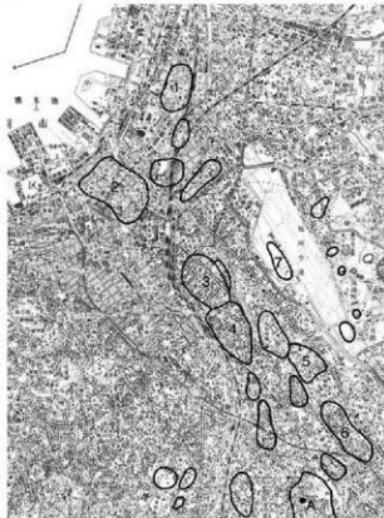
Iはじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の方法と経過	1
3. 調査体制	1
II位置と環境	1
1. 地形	1
2. 歴史的環境	3
III調査の記録	4
1. 調査の概要	4
2. 層序	4
3. 遺構と遺物	7
溝 (SD)	
SD01	7
SD02	7
SD10	7
SD11	7
SD13・SD14・SD15	7
井戸 (SE)	
SE12	11
SE40	11
谷 (SX41)	11
土壤 (SX06)	19
掘立柱建物 (SB42)	21
柱穴	21
IVおわりに	22
V那珂遺跡群第113次調査区の古環境と植物利用について	24

## 挿図目次

Fig. 1 那珂遺跡群と周辺遺跡群 (1/10万)	Fig. 11 谷 (SX41) 埋土上層出土遺物実測図2 ..... 目次 (1/4) ..... 14
.....	.....
Fig. 2 那珂遺跡群の調査地点 (1/8,000) .. 2	Fig. 12 谷 (SX41) 埋土出土遺物実測図 (1/4) ..... 15
Fig. 3 113次調査地点周辺地形図 (現在 1/8,000) ..... 3	Fig. 13 谷 (SX41) 埋土下層出土遺物実測図1 (1/4) ..... 16
Fig. 4 113次調査地点周辺地形図 (昭和初期 1/8,000) ..... 3	Fig. 14 谷 (SX41) 埋土下層出土遺物実測図2 (1/4) ..... 17
Fig. 5 調査区位置図 (1/600) ..... 4	Fig. 15 谷 (SX41) 埋土出土石器実測図 (1/4) ..... 18
Fig. 6 113次調査構全体図 (1/200) ..... 5	Fig. 16 SK06実測図 (1/60) ..... 19
Fig. 7 A区南壁、東壁土層断面図 (1/60) .. 8	Fig. 17 SK06、SK05出土遺物実測図 (1/4) · 20
Fig. 8 B区東壁、C区東壁、A区北壁土層図 (1/60) ..... 9	Fig. 18 SK06出土木器実測図 (1/4) ..... 20
Fig. 9 溝 (SD) 出土遺物実測図 (1/4) ..... 9	Fig. 19 SB42実測図 (1/60) ..... 20
Fig. 10 谷 (SX41) 埋土上層出土遺物実測図1 (1/4) ..... 13	

(写真)

Ph. 1 調査区西半全景 (北東から) ..... 6
Ph. 2 調査区東半全景 (南東から) ..... 6
Ph. 3 SD01土層断面 (北から) ..... 10
Ph. 4 SD01全景 (北から) ..... 10
Ph. 5 B区東壁土層 (北西から) ..... 10
Ph. 6 B区全景 (北から) ..... 10
Ph. 7 C区全景 (北から) ..... 10
Ph. 8 C区 SD13、SD14土層 (北西から) .. 10
Ph. 9 谷 (SX41) 全景 (北西から) ..... 12
Ph. 10 谷 (SX41) 土層 (北から) ..... 12
Ph. 11 SX06全景 (北東から) ..... 19
Ph. 12 SB42と調査区東半の柱穴群 (南東から) ..... 21
Ph. 13 SP35 (SB42の柱穴) 柱材検出 (北西から) ..... 21
Ph. 14 SP21、35柱材 ..... 21
(表)
Tab. 1 113次調査周辺の調査一覧 ..... 3
Tab. 2 遺物観察表 ..... 22



1. 稲崎遺跡群 2. 博多遺跡群 3. 比恵遺跡群 4. 那珂遺跡群  
5. 板付遺跡群 6. 雜耕開道跡群 7. 鴫居遺跡群 A. 須玖岡本遺跡群 (1, 2は砂丘基盤、3~6は須玖岡本遺跡から断続的に博多湾に向かって延びる洪積台地)

Fig. 1 那珂遺跡群と周辺遺跡群 (1/10万)

## I はじめに

### 1. 調査に至る経過

平成18年3月17日、明永美智子 氏より福岡市博多区那珂2丁目37番、38番地内における共同住宅建設に伴って「埋蔵文化財の有無について(照会)」の文書が埋蔵文化財課に提出された。これを受理し、当課では書類審査を行い、同年4月6日に確認調査を実施した。同敷地は平成元年と平成16年に個人住宅建設に伴い試掘を行なって、遺構を確認していた。今回の試掘でも遺構を検出し、試掘資料と工事内容の検討から発掘調査が必要と判断した。以後、施主の明永美智子氏、株式会社エムシーコーポレイションと調査範囲、期間や費用等について協議を重ね、平成18年6月5日より調査を実施した。なお、施主の個人事業であることと個人専用住宅部分が含まれることから、要項に基づき調査費用の一部に国庫補助金を適用した。

### 2. 調査の方法と経過

調査範囲は敷地内の建物部分とした。客土が厚く廃土を敷地内に置くことが困難であったために、調査区を東西に分割し廃土を返して発掘を行った。調査区は便宜上、建物の本体部分をA区、北側ヘトレンチ状に張り出した部分の西側をB区、東部分をC区とした。(Fig. 5) 発掘調査はこのA区の西半部とB区を先行し、廃土を返してA区の東半部とC区の調査を行った。全調査が終了したのは平成18年8月1日で約2ヶ月の期間を要した。

### 3. 調査体制

調査・整理作業は以下の体制で臨んだ。

【調査主体】福岡市教育委員会 【調査総括】埋蔵文化財第1課長 山口譲治 調査係長 山崎龍雄  
【庶務】文化財管理課 鈴木由喜 【確認調査・協議】事前審査係長 濱石哲也 担当 本田浩二郎  
【調査担当】荒牧宏行 【調査作業員】大庭智子 高手興志子 関哲也 濱 フミ子 安高邦晴  
遠山 熊 原勝輝 知花繁代 坂梨美紀 相川春彦 小野山次吉 平田周二 米良恵美 渡邊和幸  
近藤未孝 【資料整理】濱石正子 松下伊都子 大石菜美子 相原聰子 橋口久美子 福島眞理子  
中山順子 庄島さよ子

## II 位置と環境

### 1. 地形

調査地点は那珂遺跡群の東端に位置する。後述のように客土が厚く、以前の地形を読み取ることが困難となっている。しかし、調査によって遺構検出面である地山のローム面の高さは隣接した95次調査と同じ標高6.8mを測り、周辺の調査に比べ低地となっていることが判った。このことは昭和初期の地形図からも読むことができ、およそ、その起伏も判断できる。すなわち、Fig. 4で示した水田との境界線がその台地の落ち際を示していると考えられる。従って、調査地点は東側に開口した谷の谷頭付近に位置していると考えられ、調査による谷落ちのラインもこのことを表している。

地山が八女粘土に変わると標高は7次調査や本調査から6.0m前後とみられ、この付近が台地の落ち際と思われる。資料不足ではあるが、この標高の推定ラインを付け加えておく。なお、北東方向では109次調査によって現在の那珂川の左岸まで台地が延びることが判明している。

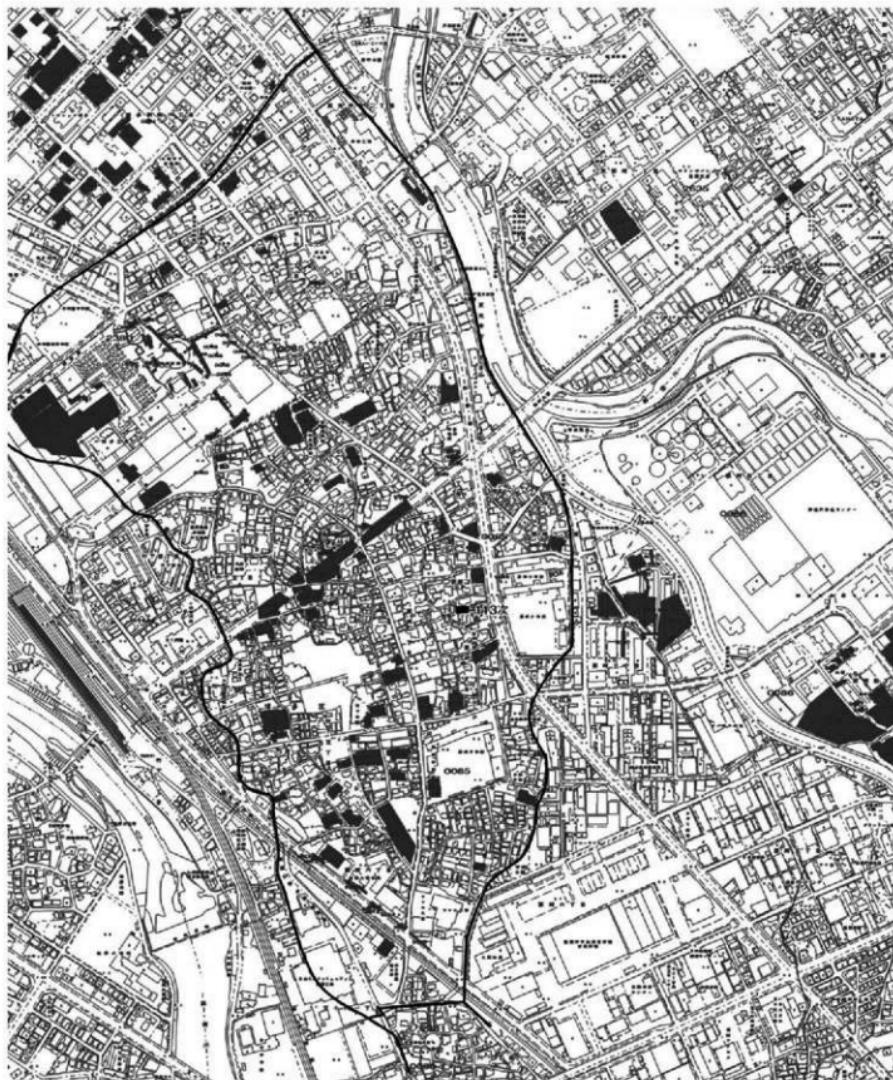


Fig.2 那珂遺跡群の調査地点（1/8,000）



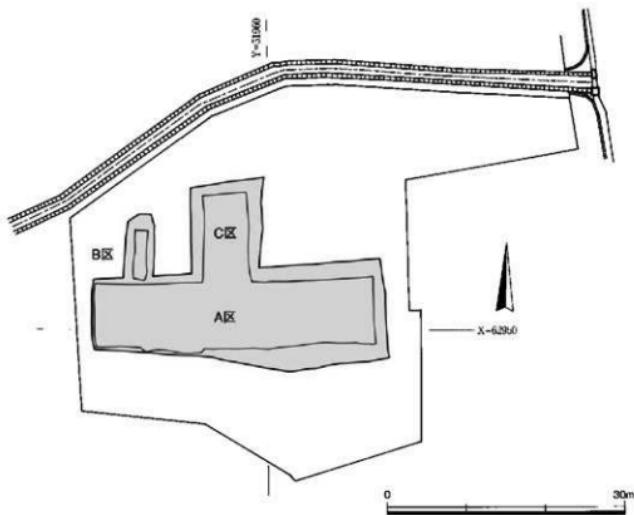


Fig.5 調査区位置図 (1/600)

### III 調査の記録

#### 1. 調査の概要

調査地点は洪積台地に占めた那珂遺跡群の東端に位置し、台地の落ち際ラインと埋没谷（SX41）を検出した。埋没谷からは落ち際を中心に弥生前期から古墳前期までの土器片が多量に出土した。谷部は古墳時代後期（6世紀後半から末）には埋没し、古墳時代後期、奈良時代（8世紀後半）と中世の集落が周辺に展開していたものと思われる。中世後半期には館を囲んだ方形溝の可能性があるSD01が検出された。

#### 2. 層序 (Fig. 6 ~ 8)

現状は標高8m前後の平坦地に整地されているが、整地に用いられた客土層は厚く、90~140cmを測る。この客土層の下に現代までの水田土壤が酸化鉄集積層を間に挟んで層厚20~40cm堆積している。

水田耕作土の下は谷部（SX41）付近では遺物を含まないグライ化した灰褐色土が数cm程度薄く堆積し、さらに下層の地山である鳥栖ロームに変わる。また、谷部（SX41）の埋土上部には層界が明瞭な褐色土（Fig. 7 の 4層）が堆積しているが、中世以降の堆積とみられる。

北側のC区では削平が著しく、水田耕作土下には客土が堆積し、地山の鳥栖ロームが水平にならざっているため、柱穴等の遺構は消滅している。

遺構検出面とした地山の鳥栖ロームは北側と調査区西端では削平が著しく、標高6.8mから6.6mま

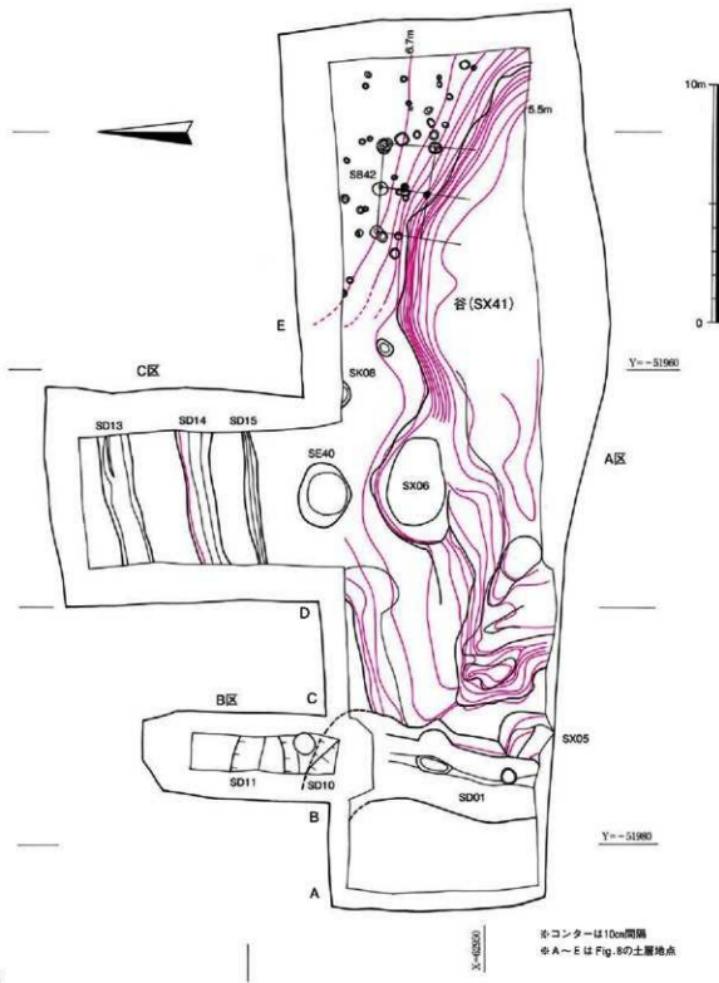


Fig. 6 113次調査造構全体図 (1/200)



Ph.1 調査区西半全景（北東から）



Ph.2 調査区東半全景（南東から）

では水平に近く均され、南側の谷部（SX41）の落ち際周辺では標高6.6mから6.3mまで緩やかに下降し、グライ化した鳥栖ロームの下部に変わる。さらに、谷部中の標高6m前後で白色粘土の八女粘土がみられるようになる。

### 3. 遺構と遺物

#### 溝（SD）

検出された溝は5条であるが、いずれも中世以降に掘削されている。

##### SD01 (Fig. 6, 7 Ph. 3, 4)

調査区の東端で検出された。幅3.7m、断面は漏斗状を呈し深さ1.4mを測る。最下面是幅50cmの平坦面をなすが、1箇所出水したと見られる部分の下底が深くなり、その上端も東へ突出していた。

南北に延長したSD01は北側へ張り出した調査区（B区）との境付近でSD10に接続し、西側へ屈曲していくとみられる。形状から館を囲む方形区画溝の可能性が高い。

##### 出土遺物（Fig. 9）

出土遺物は中位のビニール袋1個分ほどである。わずかな白磁片のほか奈良時代までの須恵器や弥生土器を含む。下限の時期は1の白磁にみられるように、12世紀以降の掘削の時期が考えられるが、形状や規模から近接した47次調査で検出された溝のように中世後半期まで下る可能性が高い。

##### SD02 (Fig. 9)

SD01東側の上端に平行して幅約50cm程度の溝が検出された。浅く調査中に不明瞭となり記録が不可能となった。SD01の肩が壊れたものと思われる。8世紀代までのコンテナ1箱弱の遺物が出土した。

##### SD10 (Fig. 6, 8 Ph. 5, 6)

北側に張り出したB区で検出した。SD01が延長してくるものと予測していたが、立ち上がりが検出され、西側へ湾曲していくものと考えられる。

##### SD11

北側へ張り出した調査区（B区）で検出された。SD（溝）としたが狭い調査区であるために形状は不明な上に、東側の延長は確認されていないので土壤の可能性もある。

B区で検出した形状は幅3.2m、深さ40cmで底面に起伏がみられる。最下層の16、17層は砂層で水流があったことを示している。

切り合い関係からSE12より新しいが、SD10との前後関係は不明である。

#### 出土遺物

須恵器と土師器片が数点のみ出土した。掘削時期は決められない。

##### SD13・SD14・SD15 (Fig. 6, 8 Ph. 7, 8)

北側へ張り出した調査区（C区）で検出した溝である。SD13は幅1.2m、深さ30cm、SD14は幅1.5m、深さ70cm、SD15は幅30~50m、深さ5cmを測り、いずれの埋土も粘質土で水流の跡はみられない。

3本は平行して走行しているが、その延長は西側のB区においては判然としない。SD13はB区の範囲外と思われる。SD14の延長線はSD11の北側上端とはほぼ合致するが、方向とその幅に違いが大きいため、その延長は不明である。SD15は浅いため、B区では削平され消滅している可能性がある。

#### 出土遺物

掲載した図のほか弥生土器、土師器、須恵器が数点出土したにすぎない。出土遺物が少ないために明確ではないが近世以降の掘削と考えられる。

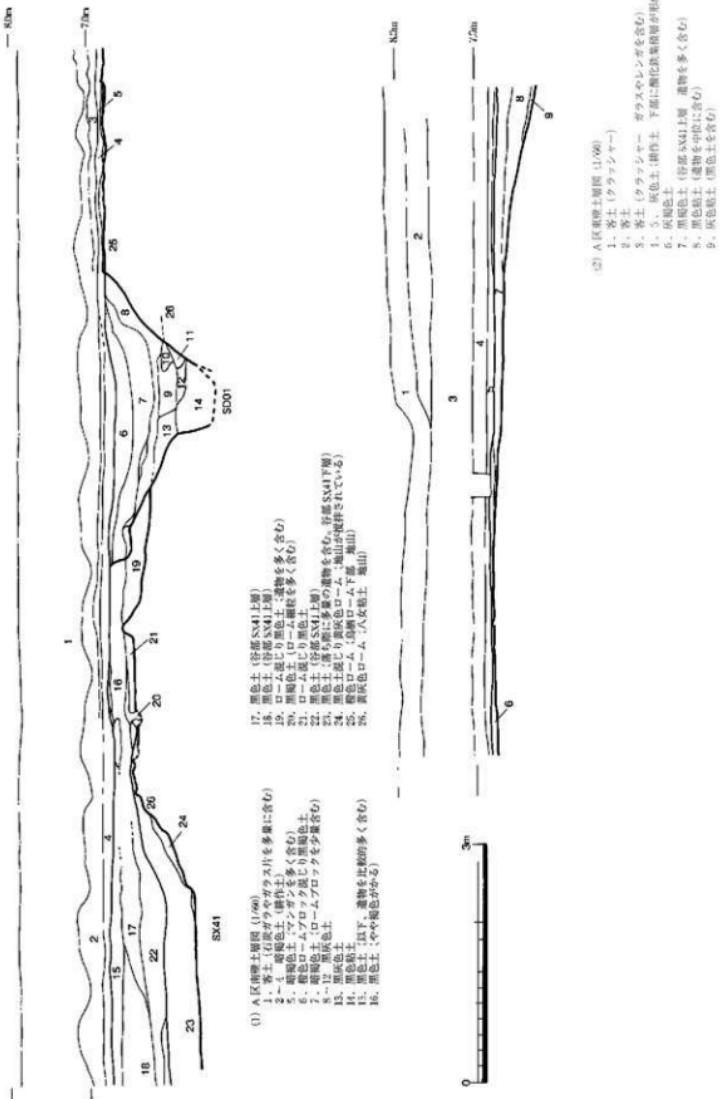


Fig. 7 A区南壁・東壁土層断面図 (1/60)

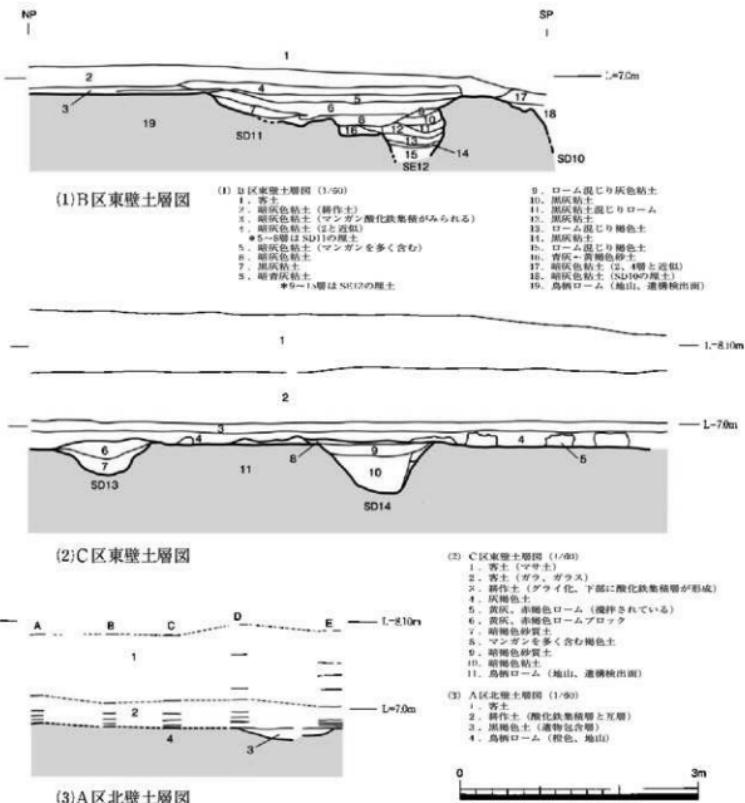


Fig.8 B区東壁、C区東壁、A区北壁土層図 (1/60)

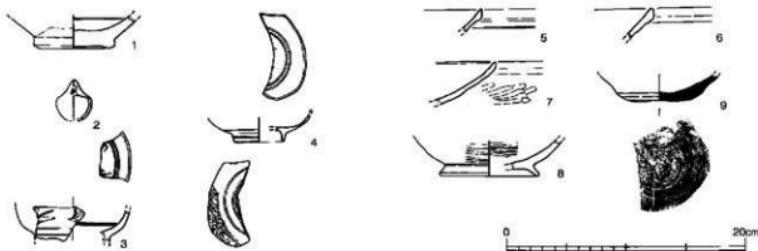


Fig.9 溝（SD）出土遺物実測図（1/4）



Ph.3 SD01土層（A区南壁 北から）



Ph.4 SD01全景（北から）



Ph.5 B区 SD10、11、SE12（北西から）



Ph.6 B区全景（北西から）



Ph.7 C区全景（北から）



Ph.8 C区 SD13、SD14土層（北西から）

## 井戸 (SE)

### SE12 (Fig. 8 Ph. 5)

B区で検出された。上部が削平され径90cm前後を測る。壁際に位置していたために完掘できなかった。既述の通り SD12に切られている。出土遺物は無い。

### SE40 (Fig. 6)

調査区のほぼ中央で検出された。A区とC区の境に位置し、当初 SK07とした。廃土置き場を確保するために調査区を反転したために全体を一度に掘ることが困難となり、また完掘することができなかった。径1.5mを測る。

#### 出土遺物

掲載した遺物の他にビニール中袋1袋分が出土した。白磁碗、瓦器、黒色土器等の破片が出土し、12世紀以降の時期が考えられる。

## 谷 (SX41)

A区の西端付近が谷頭となり北側に湾曲した上端ラインで南東側に落ちていく。II章でも記したが、昭和初期の地形図を見ると本調査区にかけて入り込んだ台地落ちがあったことが読み取れる。本調査で検出された谷落ちのラインはこの地形図にみられる谷落ちより狭くなることを示しているが、およその形状は近似しているものと思われる。

調査区北側では標高6.8mのほぼ平坦に削平された地形が続き、南側にかけて緩やかに下降しグライ化した土壤に変わっていく。谷落ち際は急激に落ち、検出面から110cmの深さで水平に近くなる。

#### 土層 (Fig. 7)

埋土は上層の黒褐色土(15、17、18層)と下層の黒色粘土層(22、23層)の2層に大きく分かれる。上層黒褐色土の上部はグライ化が進みやや灰色を呈している。この層には奈良時代(8世紀後半代)までの遺物が含まれる。

下層の黒色粘土からは谷落ち際で多量の遺物が出土した。遺物の時期は弥生時代中期が特に多く、下限は上層と同じく奈良時代(8世紀後半代)までの遺物を数点含むが、極めて出土量が少ないと分層することは困難であるが、落ち際から離れるに従い、下底より20cmまでの下部にはほとんど遺物を含まない部分がみられた。なお、標高約6mを境に下底と立ち上がりの壁面は白色粘土の八女粘土層となっている。

#### 出土遺物

##### (土器等)

谷(SX41)からは総量にして深さ13cmの中型コンテナで40箱分が出土した。出土遺物の8割以上は弥生中期を主とする弥生土器で、その他、コンテナ1箱分の須恵器が含まれる。出土状況は既述の通りである。遺物取り上げでは上層黒褐色土出土と下層黒色粘土出土に分けたが両者に時期的な差異を明確に見出すことはできなかった。しかし、数量的には下層に弥生までの遺物の割合が高く、逆に上層では須恵器の割合が高い傾向がみられる。

10~54は上層出土の土器であるが、弥生中期から奈良時代までの遺物を含む。遺物量は弥生中期が最も多く、その他、弥生終末~古墳初頭、古墳時代後期(7世紀初頭)に時期に集中している。最も新しい時期は25の須恵器蓋の8世紀後半頃であるが、出土遺物が比較的集中した古墳前期から空白の時期を隔てた49、50の須恵器にみられる7世紀初頭までに谷(SX41)の埋没時期を求めることがで



Ph.9 谷(SX41) 全景(北西から)



Ph.10 谷(SX41)土層(北から)

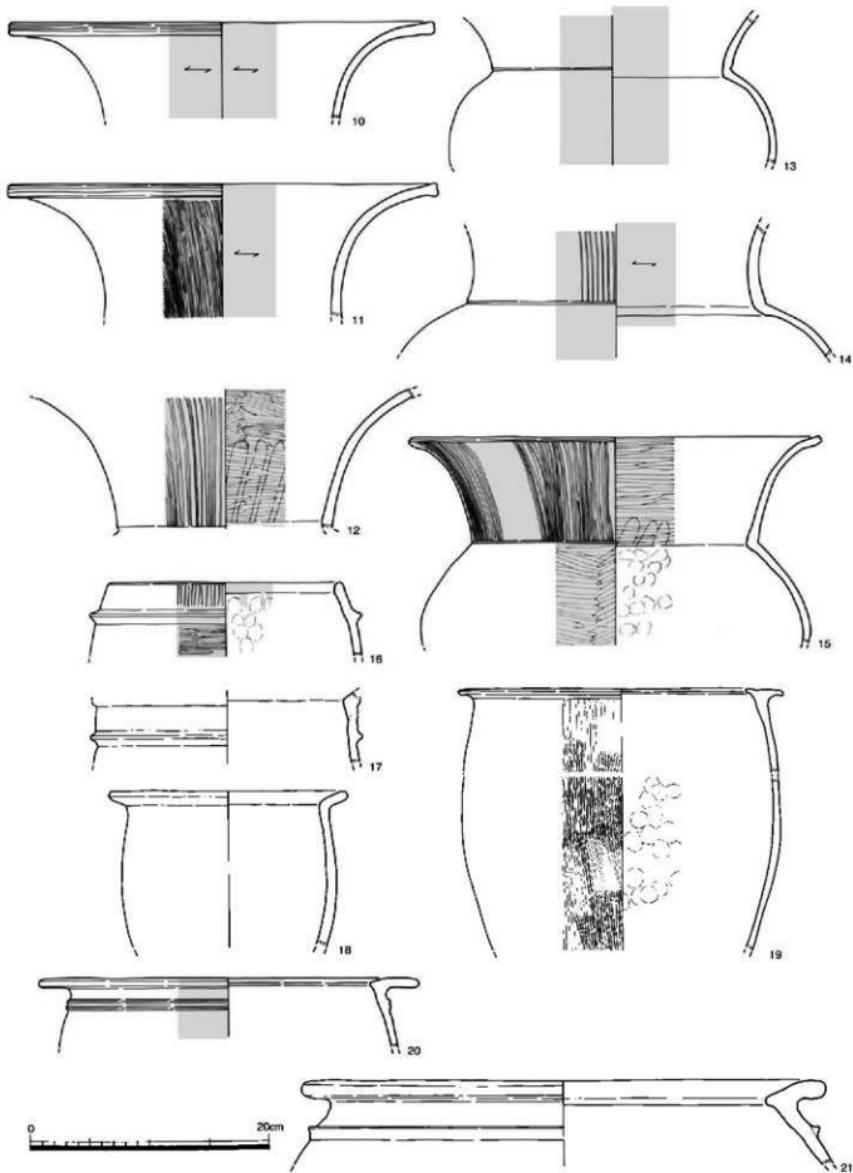


Fig.10 谷 (SX41) 墓土上層出土遺物実測図 1 (1/4)

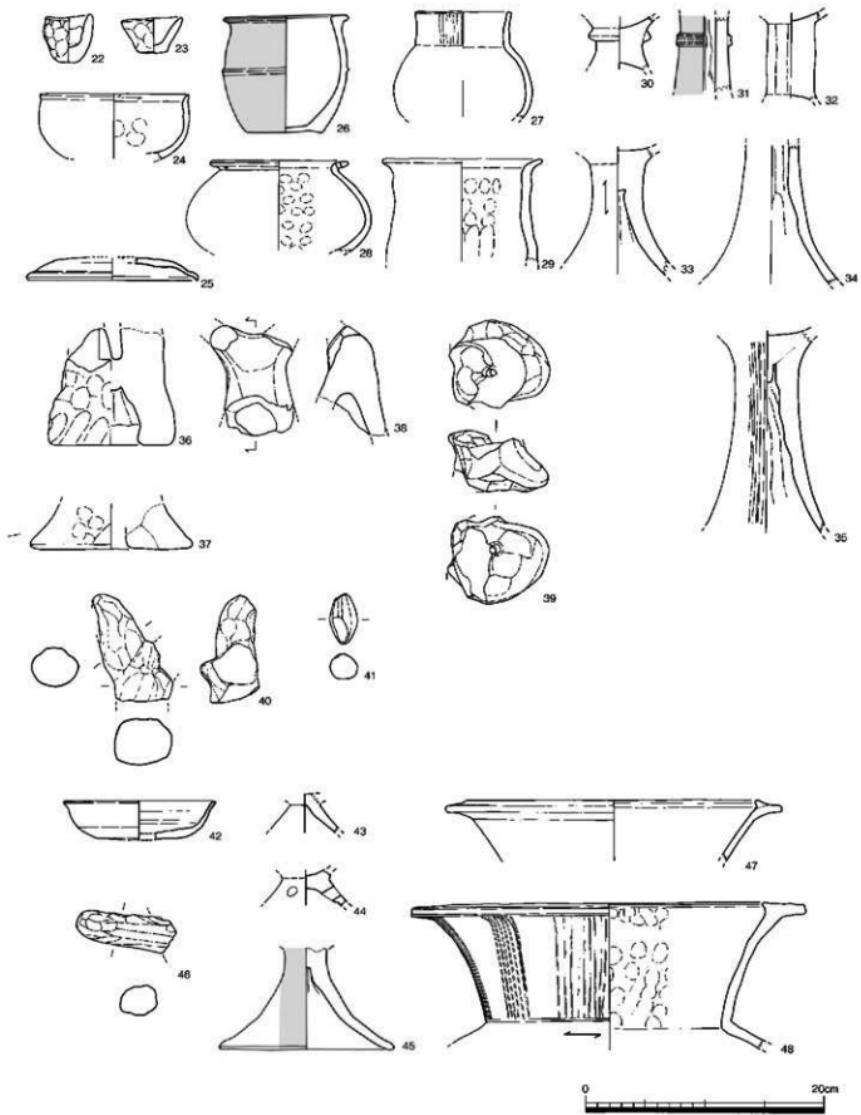


Fig. 11 谷 (SX41) 埋土上層出土遺物実測図 2 (1/4)

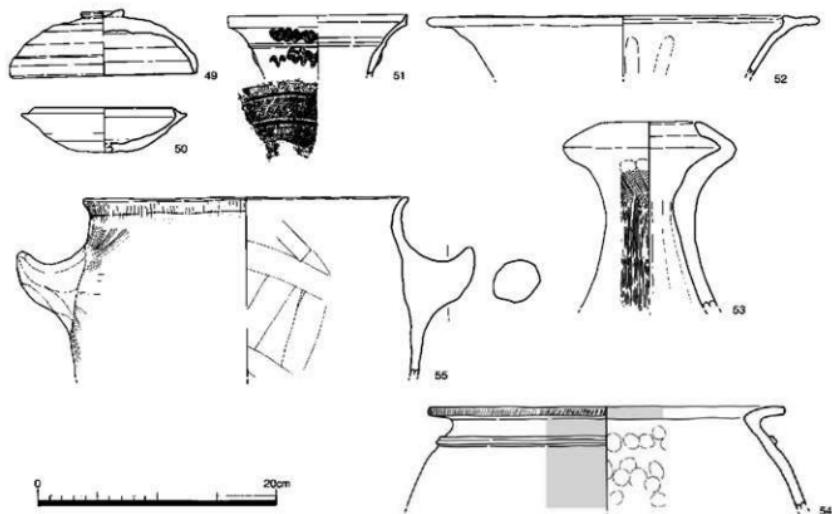


Fig. 12 谷 (SX41) 埋土出土遺物実測図 (1/4)

きる可能性がある。

出土遺物中、注意される遺物に22、23の祭祀に関連したものと思われるミニチュア土器や38の二又になった支脚、46の韓式土器の影響を受けたと思われる瓶取手がある。

55~74は下層出土の土器である。56、57の須恵器をはじめ少量の須恵器を含むが、弥生中期を主とした遺物が出土し、その割合は上層に比べ高い。判別できた層位に明確な時期差を見いだすことはできなかったが、下層黒色土中に時期差を有した層位が存在したことも考えられる。

出土遺物中、最も古い土器は72~74の前期突帯文土器であるが、出土状況から弥生中期の集落が存続していた時期には谷地形が形成されていたものと考えられる。その他、注意される遺物に60の貼り付け文を施した祭祀土器、62の赤色顔料を塗布した取手があげられる。

#### (石器)

石包丁、砥石が多く、磨石、敲石、凹石が次いで出土した。S6の全体には煤と思われる黑色炭化物が付着している。S11は杵状に握り部分を成形した磨石である。

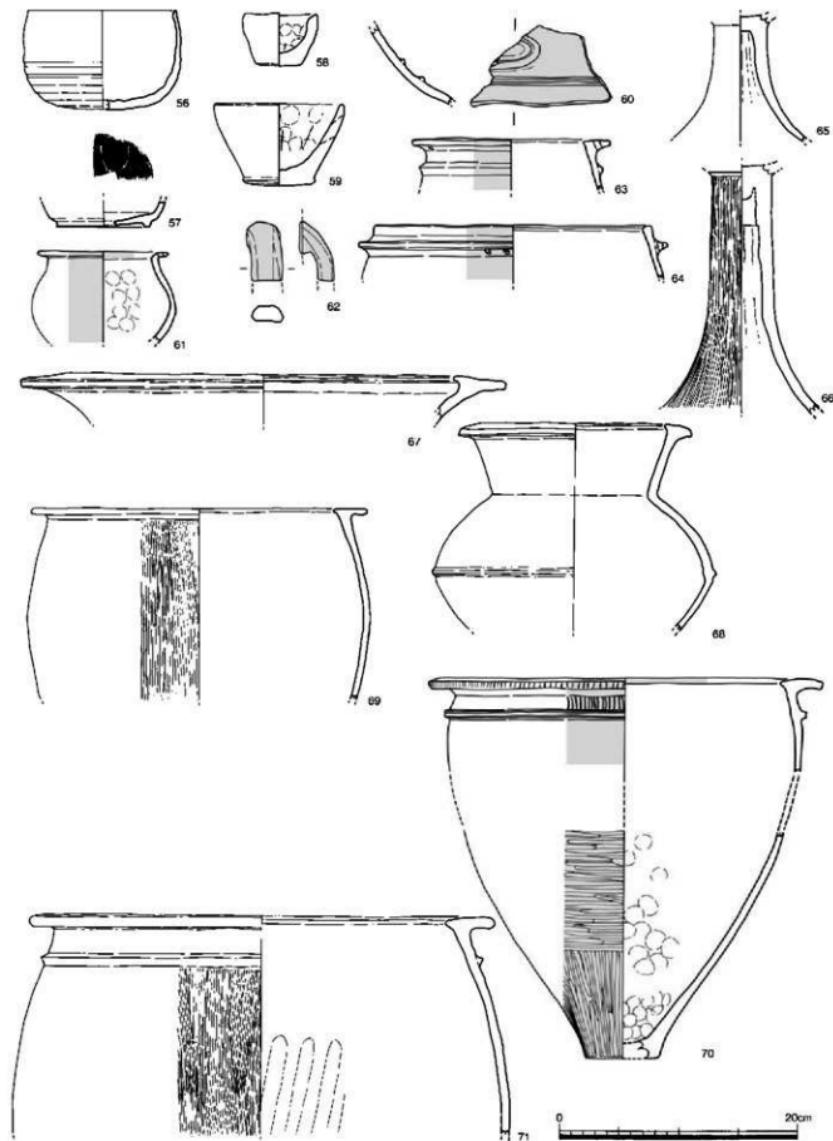


Fig.13 谷 (SX41) 墓下層出土遺物実測図 1 (1/4)

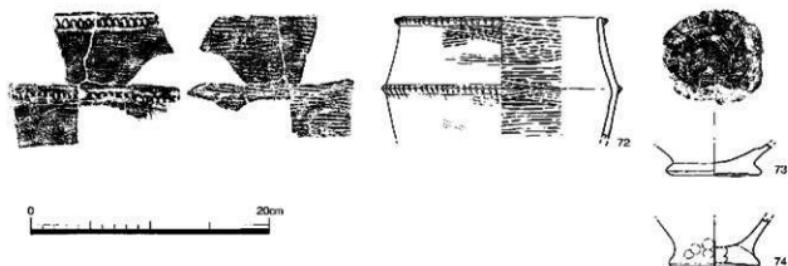


Fig. 14 谷 (SX41) 埋土下層出土遺物実測図 2 (1/4)





Fig.15 谷 (SX41) 埋土出土石器実測図 (1/4)

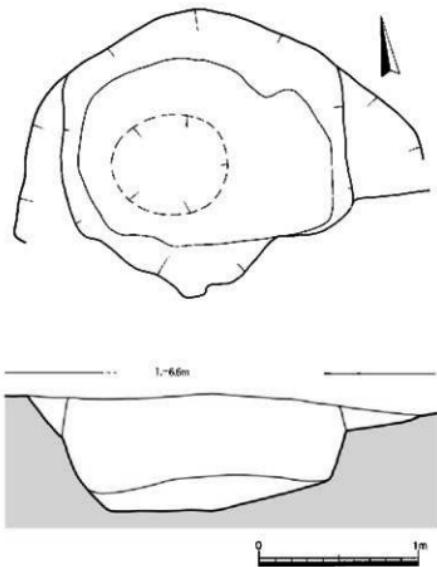
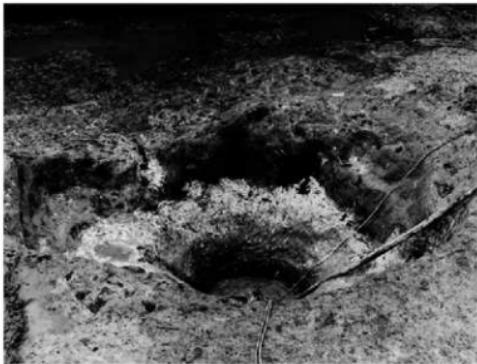


Fig. 16 SX06実測図 (1/60)



Ph. 11 SX06全景 (北東から)

#### 土壠 (SX06)

谷落ち際に検出された。略方形に近いプランを呈し、長軸長5.0m、短軸長3.7mを測る。下底は埋土が黒褐色の粘質が強い土であった為に掘りすぎているが深さは146cm前後とみられる。土器等に混じって伐木や木器のほかヤマモモ、シイ、ムクノキ、ムクロジの種実が20個出土した。廃棄土壠とも考えられるが、谷 (SX41) の岸に設置されていることや規模が比較的大きい! 基が単独で設置されていることから水漬けする貯蔵穴のような機能も考えられる。

なお、埋土から採取し鑑定した草木類のイネ、ヒヨウタン、メロン類の種子については調査現場での採取において周辺から混入した可能性があり、その結果については保留にして検討を加えたい。

#### 出土遺物

コンテナ1箱分が出土した。出土遺物の下限時期は弥生中期後半と思われる。出土遺物の79は径9.5cmの円筒形を呈し、口縁端部が短く外反する。内面の下部に絞りの痕跡を残す。外面には赤色顔料が塗布されている。形状から器台の可能性が高い。

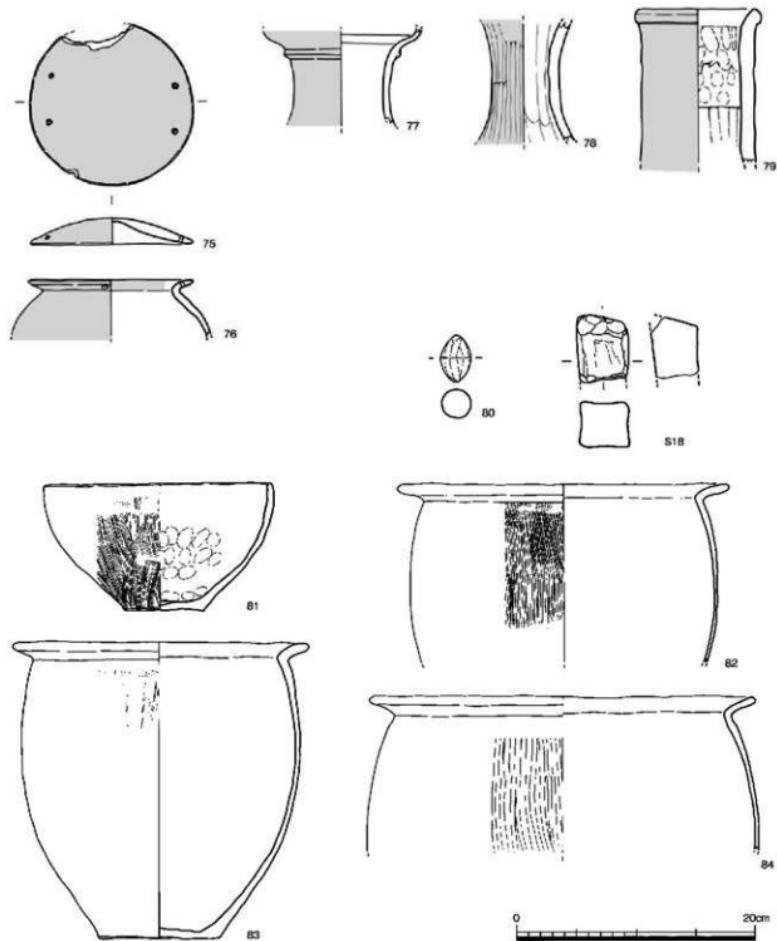


Fig. 17 SK06, 05出土遺物実測図 (1/4)



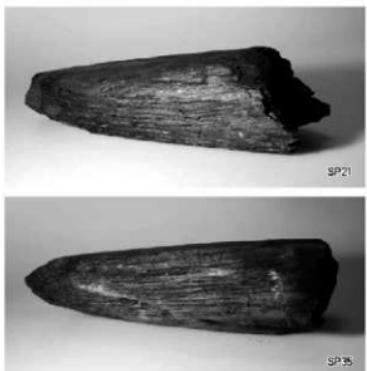
Fig. 18 SK06出土木器実測図 (1/4)



Ph.12 SB42と調査区東半の柱穴群（南東から）



Ph.13 SP35 (SB42の柱穴) 柱材検出（北西から）



Ph.14 SP21, 35柱材

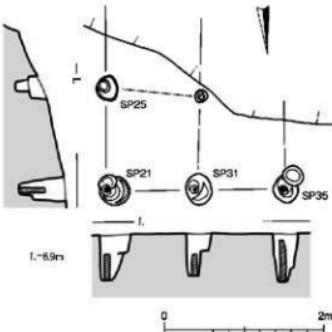


Fig.19 SB42実測図 (1/60)

#### 掘立柱建物 (SB42)

調査区の東半で検出された。おそらく $2 \times 2$ 間の純柱建物跡と考えられるが、南側の谷部にかかった柱穴は検出できなかった。当初、谷部の開析によって柱穴が消滅したものと考えていたが、谷 (SX41) の遺物出土状況から谷部が埋没した古墳時代後期以降に構築されたものと考えられる。

検出された柱穴には柱材が遺存し、鑑定したSP21の柱材は針葉樹のカヤであった。市内では稀少な例という (p-27)。他に未鑑定であるがSP31, 35からも柱材が出土した。

#### 柱穴

調査区の東半部の谷落ち際近くを中心に検出された。北側は次第に削平が深くなり、張り出したB、C区では検出されなくなる。谷部や他の遺構からの出土遺物から弥生前期から古墳時代前期、古墳時代後期 (6世紀後半～7世紀初頭)、中世 (12世紀代)、中世後半 (15世紀)～近世の時期のものが考えられる。

## IV 終わりに

検出遺構の時期的な変遷について

埋没谷（SX41）の出土遺物は（Ⅰ期）弥生時代前期（板付I式）、（Ⅱ期）弥生時代中期中葉～中期後半、（Ⅲ期）弥生終末～古墳時代前期、（Ⅳ期）古墳時代後期（7世紀初頭前後）、（Ⅴ期）奈良時代（8世紀後半代）に集中している。特に遺物の大半を占めているのは（Ⅱ）の弥生中期後半代の時期で、集落の営みが活発に行われていたとみられる。Ⅲ期の遺物量は減少し、またⅣ期との間には空白がみられる。

谷落ち際に検出されたSB42はその位置や柱穴の下底のレベルから谷部が埋没した後に構築されたものと考えられる。構築時期はⅣ期もしくはⅤ期とみられるが、その規模や柱穴の大きさ、さらに那珂遺跡で検出された絆柱建物跡の状況からⅣ期のものかと思われる。従って、Ⅲ期とⅣ期の間に谷部が埋没し、その上部まで集落範囲が拡大したものとみられる。

台地落ち際に古墳時代初頭までの遺物が発見されている状況は近接した下月隈C遺跡や那珂109次でもみられ、その後空白の時期があることも同様で、土地利用と集落変遷に注目される。

なお、埋没谷理土の花粉分析から下月隈C遺跡同様に古墳時代前期までは常緑広葉樹を主体とした植生がみられる。

次にこの台地縁辺で検出された遺構の時期はSE40の中世、12世紀代（Ⅶ期）である。この時期の遺構、遺物も同じく那珂遺跡の台地際でみられることが多い。周辺の沖積部開発とともに新しい集落開発が進んだものと思われる。

SD01は近接した那珂47次調査でみられた溝同様に中世後半期に含まれる。周辺を含め幾つかの館が建ち並んでいたとみられる。また、理土中から出土した松の種子から周辺は切り開かれた環境が見受けられる。

その後、SD13～SD15の水路にみられるように近世、そして現代までは水田として利用され、台地のローム層まで造成され、前代までの遺構は消滅、削平された。

Tab. 2 遺物観察表

番号	遺構	種類	器形	口径	高さ	色調	調整	備考	時期
1	SD01	白磁	碗			淡緑灰赤	外面下位露胎		11C
2	SD14	瓦質	土鉢	3.5	外黒里、内灰色	内外面ナデ、内面上部に絞り痕跡		外面黒色に極す	
3	SD13	染付	碗			淡青白色			近世
4	SD13	染付	碗			淡青白色			近世
5	SE40	白磁	碗			淡緑灰赤			12C
6	SE40	白磁	碗			淡黄灰色			12C
7	SE40	瓦器	碗			外黒～灰、内灰	口縁部ヨコナデ、外面下位、ミガキ		13C
8	SE40	黒色土器	碗			黒色	体部ミガキ、外面高台～底部ヨコナデ、内底部ナデ		11～12C
9	SE40	須恵器	环			赤黒褐色	外天井部回転ハラ削り、内天井部ナデ、他ヨコナデ		6～7C
10	SX41上層	弥生土器	広口壺	35.8		赤色顔料塗布	外面不明、内面横位のミガキ		弥生中期
11	SX41上層	弥生土器	広口壺	36.2		赤色顔料塗布	外面部横位のミガキ、内面横位のミガキ、ナデ		弥生中期
12	SX41上層	弥生土器	広口壺			赤色顔料塗布	外面部立のミガキ、内面横位のミガキ部に縱位のナデを加える		弥生中期
13	SX41上層	弥生土器	広口壺			赤色顔料塗布	調整不明		弥生中期
14	SX41上層	弥生土器	広口壺			赤色顔料塗布	外面部横位で縦位のミガキ、胸部横位のミガキ、内面不明		弥生中期
15	SX41上層	弥生土器	広口壺			赤色顔料塗布	外面部立で縦位のミガキ、面部横位のミガキ、内面ナデ		弥生中期
16	SX41上層	弥生土器	無颈壺	19.8		赤色顔料塗布	外面部青より上位は縦位のミガキ、下位は横位のミガキ、内面ナデ		弥生中期
17	SX41上層	弥生土器	不明			黒色顔料塗布？	外面部横位のミガキか。内面ナデか。		弥生中期
18	SX41上層	弥生土器	壺	20		褐色	外面不明、内面ナデ		弥生後期初頭
19	SX41上層	弥生土器	壺	27.4		外黒、内褐色	外面部縦位のハケメ、内面ナデ		弥生中期
20	SX41上層	弥生土器	壺	32		赤色顔料塗布	不明		弥生中期
21	SX41上層	弥生土器	壺	44.2		黄褐色	外面不明、内面横位のナデ	器面が剥落	弥生中期
22	SX41上層	手捏ね	4	4		暗褐色	ナデ		
23	SX41上層	手捏ね	5.1	3	黒～黄灰色	外面丁寧なナデ、内面ナデ			
24	SX41上層	弥生土器	壺	12.6		明赤褐色	外面不明（ミガキか）、内面ナデ	胎土緻密	弥生後期か
25	SX41上層	須恵器	环蓋	14.5	2	灰色	内外面ヨコナデ		8C

26	SX41上層	弥生土器	甕	10.5	9.9	赤色顔料塗布	内外面の器面が剥落し調整不明	ほげ定形	弥生中期
27	SX41上層	弥生土器	壺	8.2		明黄褐色	外面口縁部縦縫のミガキ、その他の不明	器面が剥落	弥生後期
28	SX41上層	弥生土器	壺	11.6		褐色	外表面不明、内面ナデ 口縁部に穴になった穿孔あり。	器面が剥落	弥生後期初頭
29	SX41上層	弥生土器	甕	13.4		暗褐色	外面横位のナデ、内面ナデ、指押さえ	鉛土緞密	弥生後期
30	SX41上層	土師器	高环			暗褐色	外面調整不明		古墳初頭
31	SX41上層	弥生土器	高环			赤色顔料塗布	外面不明、内面絞り裏		古墳中期
32	SX41上層	土師器	高环			黄褐色	調整不明	脚部中実	古墳初頭か
33	SX41上層	弥生土器	高环			黄褐色	調整不明		弥生中~後期
34	SX41上層	弥生土器	高环			黄褐色	調整不明		弥生中期
35	SX41上層	弥生土器	高环			赤色顔料塗布	調整不明、环部をソケット状に嵌め込む	器面が剥落	弥生後期-終末
36	SX41上層	弥生土器	支脚か			明黄褐色	外面ナデ、指押さえ		弥生終末
37	SX41上層	弥生土器	支脚か			明黄褐色	外面ナデ、指押さえ		弥生終末か
38	SX41上層	土師器	支脚			赤褐色	外面ナデ、指押さえ	両角で支える	古墳初頭
39	SX41上層	弥生土器	器台か	5		明黄灰色	外面ナデ、指押さえ、穿孔1有り		古墳終末か
40	SX41上層	土師器	支脚か			赤褐色-黄褐色	ナデ、指押さえ	両角で支える?	古墳初頭か
41	SX41上層	土製品	投弾	4.3		暗灰褐色	ナデ		弥生中期
42	SX41上層	須恵器	环	12.8		外墨刷、内黒褐色	外面ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ、内面ヨコナデ	焼成不良	7°C
43	SX41東半上層	土師器	高环			淡赤褐色	不明		古墳初頭
44	SX41東半上層	土師器	高环			黄灰褐色	不明、穿孔3箇所		古墳初頭
45	SX41東半上層	弥生土器	高环			赤色顔料塗布	不明		弥生中期初頭
46	SX41東半上層	土師器	取手			淡赤褐色	ナデ	瓶取手	古墳初頭-前
47	SX41東半上層	弥生土器	壺			黄灰褐色	不明		弥生中期器
48	SX41東半上層	弥生土器	壺	33.2		黒色顔料塗布	外面頭部に縦縫の暗色、内面ナデ。指押さえ		弥生中期
49	SX41	須恵器	蓋	15.7		青灰褐色	外面部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ、内面ヨコナデ、ナデ		5~7°C
50	SX41	須恵器	环身	11.8		青灰褐色	外面部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ、内面ヨコナデ、ナデ		7°C
51	SX41	須恵器	はそう	15.1		青灰褐色	外面部横波状文、内面ヨコナデ	灰軸付着	6°C
52	SX41	弥生土器	甕	33		黄褐色	不明		弥生中期
53	SX41	弥生土器	甕	8		黄褐色	外面部縦位のハケ、内面ナデ		弥生中期
54	SX41	弥生土器	甕	39		赤、一部黒色顔料	外面部ミガキ、内面ナデ、指押さえ	口縁上面に黒色顔料が残る	弥生中期
55	SX41	土師器	甕	28		黄褐色	外面部ハケ、内面ヘラケズリ		6°C
56	SX41下層	須恵器	楕	12.5	8.4	青灰褐色	外底部沈没、上ヨコナデ、下底部ヘラケズリ、内面ヨコナデ		6°C
57	SX41下層	須恵器	环身			灰色	内面部ヨコナデ、内底部にU字状のヘラ記号有す		8°C
58	SX41下層	弥生土器	手程ね	6.4	4.4	黄褐色	ナデ、指押さえ		弥生中期
59	SX41下層	弥生土器	鉢	11	6.9	暗褐色	ナデ、指押さえ		弥生中期
60	SX41下層	弥生土器	甕			赤色顔料塗布	ナデ、外面上に貼り付け文有す		弥生中期器
61	SX41下層	弥生土器	甕	11		赤色顔料塗布	外面部ミガキ、内面ナデ、指押さえ、口縁部に対する穿孔あり。		弥生中期
62	SX41下層	弥生土器	取手			赤色顔料塗布	縦横向き不明。		弥生中期少
63	SX41下層	弥生土器	甕	16.6		赤色顔料塗布	外面部ミガキ、内面ナデ、指押さえ。口縁部に対する穿孔あり。		弥生中期器
64	SX41下層	弥生土器	甕	23.4		赤色顔料塗布	外面部ミガキ、横ナデ、内面横ナデ、帯縫に穿孔あり。		弥生中期
65	SX41下層	弥生土器	高环			黄褐色	外面部不明、内面絞り裏、横ナデ		弥生中期
66	SX41下層	弥生土器	高环			赤色顔料塗布	外面部ミガキ、内面横ナデ、ナデ		弥生中期少
67	SX41下層	弥生土器	甕	41		黄褐色	器面が剥落し、外面部不明。内面横ナデ		弥生中期
68	SX41下層	弥生土器	甕	19.6		外墨刷、内黒褐色	不明、内面体部ナデ		弥生中期
69	SX41下層	弥生土器	甕	28.2		褐色	外面部縦位のハケメ、内面横ナデ、ナデ		弥生中期
70	SX41下層	弥生土器	甕	33		赤色顔料塗布	外面部ミガキ、内面ナデ、指押さえ		弥生中期
71	SX41下層	弥生土器	甕	39		黄褐色	外面部ハケ、内面横ナデ、ナデ		弥生中期
72	SX41下層	弥生土器	甕	18		煙、青墨刷、内黒褐色	内外面、横位の条痕		弥生前期
73	SX41下層	弥生土器	甕			暗褐色	外面ナデ、内面条痕		弥生前期
74	SX41下層	弥生土器	甕			褐色、青、黒褐色	外面ナデ、内面不明		弥生前期
75	SX05	弥生土器	蓋	13.8	2.4	赤色顔料塗布	外面不明、内面ナデ		弥生中期
76	SX05	弥生土器	甕	14		赤色顔料塗布	調整不明		弥生中期
77	SX05	弥生土器	甕			赤色顔料塗布	外面部横位のミガキ、内面横ナデ、ナデ		弥生中期
78	SX05	弥生土器	甕			赤色顔料塗布	外面部縦位のミガキ、内面ナデ、絞り痕		弥生中期
79	SX05	弥生土器	不明	10.5		赤色顔料塗布	背を呈し、口縁部は表面粘着、外面部調整不明、内面ナデ、絞り痕		弥生中期
80	SK06	土製品	投弾		3.9	暗褐色	ナデ		弥生中期
81	SK06	弥生土器	鉢	19.4	10.9	暗黄褐色	外面部縦位ハケメ、内面ナデ、指押さえ		弥生中期
82	SK06	弥生土器	甕	28		黄褐色	外面部縦位かイタハケ、内面ナデ		弥生中期
83	SK06	弥生土器	甕	25.1	24.9	黄褐色	外面部タハケ後ナデ、内面ナデ		弥生中期
84	SK06	弥生土器	甕	32		黄褐色	外面部粗いタハケ後ナデ、内面ナデ		弥生中期

## V 那珂遺跡第113次調査区の古環境と植物利用について

バリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

那珂遺跡第113次調査区では、台地縁辺を削り込む谷落ち際の一部が検出されている。遺物の出土状況や遺構構造面の状況から、谷は弥生時代を通じて形成され古墳時代後期に埋没していたと想定されている。その他、弥生時代中期の土坑、古墳時代後期以降の絶柱建物、中世後半の溝などの遺構が検出されている。

今回の分析調査では、弥生時代以降の古植生や植物利用状況に関する情報を得ることを目的として、花粉分析、種実同定、樹種同定を実施する。なお本稿は、紙数の関係で成果品である報告書を抜粋したものである。

### 1. 試料

花粉分析に用いる試料は、弥生時代前期～終末期とされるAトレンチ下層黒色土(試料番号1)の1点である。種実同定に用いる試料は、谷落ち際で検出された中期の土坑とみられるSX06(試料番号6・7)、SK06(SX06と同一遺構、試料番号8・9)から出土した種実遺体4点、計124個である。樹種同定に用いる試料は、各遺構から出土した自然木や柱など4点(試料番号2-5)である。このうち、試料番号5には接合しない4片の木材が入っており、肉眼観察で複数種類が混在している可能性が想定されたことから、全点について切片作成・同定を行う。したがって、合計点数は7点である。

### 2. 分析方法

花粉分析、種実同定、樹種同定の分析方法・手法については、当社の定法に従い実施した。各項目の分析方法は既存の調査報告書(福岡市教育委員会2004ほか)を参照されたい。

### 3. 結果

#### (1)花粉分析

結果を表1、図1に示す。試料番号1の花粉群集組成をみると、草本花粉群集が優占する。草本花粉ではイネ科が多産し、ミズアオイ属、クワ科、アカザ科、ヨモギ属、ベニバナ属近似種等を伴う。木本花粉の産出は比較的少なく、かろうじて定量解析が行える程度の産出であったが、マツ属、コナラ属アカガシ亜属が多く産出し、モミ属、ツガ属、スギ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属、エノキ属ムームクノキ属等が認められる。

表1. 花粉分析結果

種類	試料番号	1
木本花粉		
モミ属		13
ツガ属		5
スギ属		5
カバノキ属		2
ブナ属		5
コナラ属コナラ亜属		7
コナラ属アカガシ亜属		19
マツ属		2
シイノキ属		6
エノキ属ムームクノキ属		8
キハダ属		1
ブンボク属		1
草本花粉		
イネ科		7
カヤツリグサ科		28
ミズアオイ属		23
クワ科		30
ギンナン属		3
モウセンゴケ科ムーカニギカミ属		13
タブ科		9
アカザ科		80
ナデシコ科		4
アブロハ科		2
セリ科		5
オナモニ属		1
ヨモギ属		23
オナモニ属		7
ベニバナ属近似種		89
キク泰科		3
タケボク野草科		2
不明花粉		12
シダ類		71
シダ類胞子		
合計		104
木本花粉		54.9
草本花粉		17
不明花粉		71
シダ類胞子		71
種計(不明を除く)		71

図1. 花粉化石群集

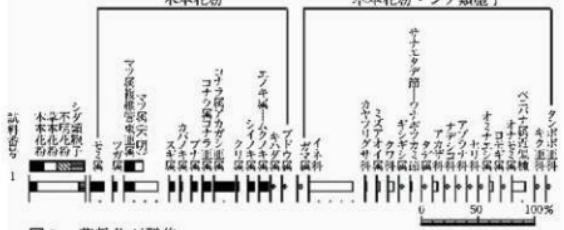


図1は、木本花粉と大木花粉の組成を示す。草本花粉・シダ類胞子は量が少ないので木本花粉を示す。

## (2)種実同定

結果を表2に示す。木本7分類群(イヌガヤ、ヤマモモ、シイ属、ムクノキ、サンショウ属、ムクロジ、エゴノキ属)30個、草本5分類群(イネ、カナムグラ、メロン類(マクワ・シロウリ型)、メロン類(雜草メロン型)、ヒヨウタン類)94個、計124個の種実が同定された。栽培のために渡来した植物は、イネ、メロン類、ヒヨウタン類である。

なお、種実の形態的特徴等の記載については、紙数の都合で割愛する。

## (3)樹種同定

樹種同定結果を表3に示す。試料は、針葉樹2種類(マツ属複縫管束亞属、カヤ)、広葉樹5種類(コナラ属コナラ亞属コナラ節、ツブライ、ツバキ属、ムクロジ、カキノキ属)に同定された。なお、各種類の解剖学的特徴等の記載については、紙数の都合で割愛する。

## 4. 考 察

### (1)古植生

SX06から出土した弥生時代中期頃の自然木には、コナラ節、ツブライ、ムクロジ、カキノキ属の4種類が認められた。種実遺体では、SX06(SK06)から針葉樹のイヌガヤ、広葉樹のヤマモモ、シイ属(シイノキ属)、ムクノキ、サンショウ属、ムクロジ、エゴノキ属、草本のカナムグラが確認された。このうち、イヌガヤ、ヤマモモ、ツブライ(シイノキ属)、ムクノキ、サンショウ属、ムクロジ、エゴノキ属は暖温帶性常緑広葉樹林を構成する種類、カナムグラは照葉樹林の林緣部や開けた周辺域に生育する種類であり、コナラ節は二次林や河畔林を構成する種類を含む。福岡市内では、板付跡遺、田村跡遺、比恵(瑞穂)跡遺、井相田D跡遺等で、自然木や垣材、杭、畦畔材など古植生を反映すると考えられる土木材・施設材の樹種同定が実施されているが、シイノキ属、アカガシ亞属、サカキ、エズリハ属、タブノキ属等の常緑広葉樹を中心に、クヌギ節、コナラ節、クリ等の落葉広葉樹や針葉樹のスギが混在する結果が得られている(鷲倉、1976, 1977, 1981, 1984; 林・松本, 1980; バリノ・サーヴェイ株式会社, 1999)。今回確認された樹種は、これらの調査結果とも矛盾せず、周囲に常緑広葉樹を主とした植生が見られ、河畔や集落周辺などの開けた場所にはコナラ節等の落葉広葉樹も生育していたと考えられる。

弥生時代終末期までに堆積したとされる下層黒色土をみると、木本類ではマツ属、コナラ属アカガシ亞属が多く産出し、モミ属、ツガ属、スギ属、ブナ属、コナラ属コナラ亞属、シイノキ属、エノキ属ムクノキ属等の花粉が認められる。同層準から出土した木材は、常緑広葉樹のツバキ属であった。このうち、アカガシ亞属は、シイノキ属等とともに暖温帶性常緑広葉樹林の主要構成要素であり、その他にもツバキ属等の常緑広葉樹林を構成する種類が認められる。のことから、弥生時代中期同様、周辺には常緑広葉樹を主体とする植生が分布し、部分的にモミ属、ツガ属、スギ属等の針葉樹も林分を形成していたと推測される。また、低地部にはクリ属、エノキ属ムクノキ属等が、後背の丘陵・

表2. 種実同定結果

分類群	部材・状態	番号	時代	生存中周			備考
			SX09	SX06	日付	6 7 8 9	
			06.07.29	06.07.28	6 7 8 9		
木本							
イヌガヤ	種子	-	-	-	-	1	
マツ属複縫管束亞属	球果	完形	-	-	-	-	
		破片	-	-	-	-	
ヤマモモ	桂	完形	-	-	-	-	
シイ属	葉実	研打	-	-	-	3	
ムクノキ	桂	完形	-	1	2	3	
		破片	-	3	1	3	
サンショウ属	桂	完形	-	-	-	1	
ムクロジ	種子	完形	5	-	1	-	
エゴノキ属	種子	完形	-	-	-	1	
草本							
イネ	穀	破片	-	-	-	1	栽培植物
カナムグラ	種子	完形	-	4	4	-	
		破片	-	4	-	-	
メロン類(マクワ・シロウリ型)	種子	完形	-	-	23	25	栽培植物
メロン類(雑草・メロン型)	種子	完形	-	-	10	13	栽培植物
ヒヨウタン類	種子	完形	-	2	10	-	栽培植物
		破片	-	-	-	2	

表3. 樹種同定結果

番号	遺物・研究	時代	用途	形状	樹種
2	平野地盤上	一弥生時代終末期	自然木		マツ属
3	台地地盤上	古墳時代後期(後半)	自然木		マツ属複縫管束亞属
4	SP-3	古墳時代後期以降	柱材		カヤ
5	SX06	弥生時代中期頃	自然木	棒状(大) ムクロジ 棒状(中) コナラ属コナラ亞属コナラ節 板状 カキノキ属 ミカン属状 ツブライ	

山地部等の標高の高い部分にはブナ属等の冷温帶性落葉広葉樹も生育していたと考えられる。本遺跡の東方約2kmに所在する下月隈C遺跡の弥生時代～古墳時代を通じた試料からも、アカガシ亜属、シイノキ属を主体とする花粉化石群集が得られており(福岡市教育委員会,2006)、今回の結果とも調和的である。

草本植生をみると、イネ科が多産し、ミズアオイ属、クワ科、アカザ科、ヨモギ属、ベニバナ属近似種等が認められる。これらは開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群であり、その他に検出される草本類も同様の生育環境を示すものが多く認められる。群集組成では草本類が優占することから、当時の本遺跡周辺は開けた空間が多く存在し、その草地等にこれらの草本類が生育していたと推測される。また、ミズアオイ属とともにガマ属などの水湿地生植物に由来する花粉も検出されることから、周囲に水湿地の存在も指摘される。

なお、多産するマツ属のうち、亜属まで同定できたものは全て複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属(いわゆるニヨウマツ類)は極端な陽樹であり、やせた裸地などでもよく発芽し生育することから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類である。マツ属の増加年代は各地で異なり、九州では1,500-1,000年前頃とされており、その要因の一つとして農耕に伴う植生干渉の結果として二次林等が増加したことが指摘されている(たとえば波田,1987など)。本層準でもイネ科花粉が多産するほか、ガマ属、ミズアオイ属は水田雜草としても一般的な種類である。これらのことから、稻作地の拡大等にもつながる森林伐採の結果、当時の本遺跡周辺にマツ属の二次林が存在した可能性が指摘される。

## (2)植物利用状況

SX06 (SK06) から検出されたイネ、メロン類、ヒヨウタン類は、古くより大陸より渡來した栽培種とされる。穎の破片が1個確認されたイネは、胚乳が食用される植物質食糧である。メロン類は、果実が食用に利用されるが、中粒種子のマクワ・シロウリ型、小粒種子の雜草メロン型が確認されることから、複数の品種が利用されていた可能性がある。藤下(1984)は、各時代別に遺跡出土メロン類種子の計測結果をまとめ、雜草メロン型の占める比率は、弥生時代が38%と他の時代に比べて非常に高く、古墳時代に入ると急減し、奈良・平安時代以降は5-6%に落ちていたと報告している。今回の分析調査結果でも、弥生時代中期とされるSK06より確認された雜草メロン型の占める比率は約33%と高く、藤下(1984)の傾向を支持する。なお、ヒヨウタン類は果実が食用や容器等に利用される。

これらの栽培植物の可食部である種実が、弥生時代中期の土坑とみられるSX06、SK06内より出土したことから、当該期の本遺跡周辺における利用と遺構内への廃棄等の人為的行為が推定される。イネの穎、メロン類、ヒヨウタン類は、下月隈C遺跡の弥生時代～古代の遺構からも多く出土していることから(福岡市教育委員会,2004,2005,2006)、本遺跡周辺域においても普遍的に利用されていたことが推定される。

また、SX06 (SK06) から検出された分類群のうち、イスガヤ、ヤマモモ、シイ属、ムクノキ、ムクロジは、種実が食用可能である。サンショウ属には、種実が香辛料や薬用に利用可能な種(サンショウ)を含む。ムクロジ、エゴノキ属の一種(エゴノキ)の果皮はサボニンを多く含むことから、洗濯や洗髪などに利用可能である。これらの種実は、當時利用されていた可能性はあるが、今回検出された種実遺体には、人間による利用の痕跡は認められなかった。

一方、SX06より検出された自然木のうち、カキノキ属は、日本に自生する常緑のトキワガキと、中国から栽培のために渡米したとされる落葉広葉樹のカキノキ、マメガキがあるが、木材組織の特徴から分類することは困難である。福岡市内では、板付遺跡の堰材、畦畔材、加工材、杭、自然木、田村遺跡の堰材、比恵(瑞穂)遺跡の堰材、井相田D遺跡の加工材、護岸材等に確認されており(嶋倉, 1976,1977,1984; 林・松本,1980; パリノ・サーヴェイ株式会社,1999)、付近で生育あるいは栽培されていたことが推定される。

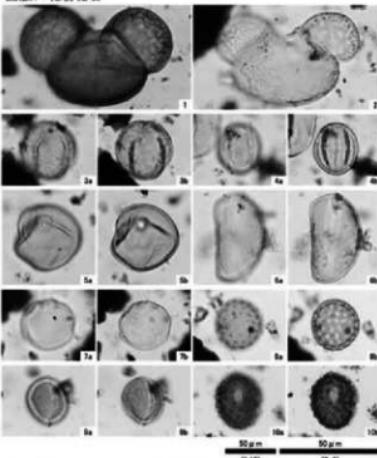
弥生時代終末期までに堆積したとされる下層黒色土からは、金原(1993)のベニバナに形態が近似する花粉が検出された。ベニバナは渡来種であり、遺跡からは古墳時代以降に検出例が多い。このことから、検出されたベニバナ属近似種がベニバナに由来するものであれば、当時の本遺跡周辺でベニバナが栽培されていた可能性もある。

古墳時代後期以降とされるSP21から出土した柱材は、針葉樹のカヤであった。カヤは、比較的大径木になる種類で、木材は針葉樹としては重硬・緻密で、強度・耐水性が高い材質を有しており、柱材としては適材である。時期が特定されていないため、類例との比較が難しいが、福岡市内では古墳時代以降の柱材にカヤが確認された例がほとんど無い。今回の結果から、時期は不明であるが、カヤが利用されていたことが推定される。今回得られた樹種同定結果は、本地域における建築部材の木材利用を考える上でも重要な資料であり、今後柱材の観察できる中で最も外側の年輪部分を利用して年代測定を行うなど、その所属時期を明らかにすることが望まれる。

#### 引用文献

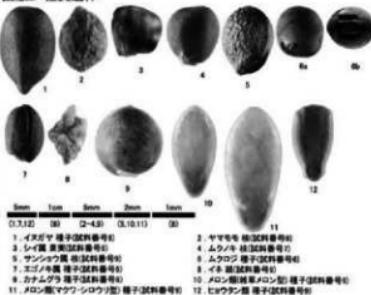
- 福岡市教育委員会,2004,下月隈C遺跡IV—福岡空港周辺整備工事に伴う下月隈C遺跡第5次発掘調査  
報告一 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第795集—本文編一,福岡市教育委員会, p.293
- 福岡市教育委員会,2005,下月隈C遺跡V—福岡空港周辺整備工事に伴う下月隈C遺跡第6次発掘調査  
報告一福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第839集—本文編一,福岡市教育委員会, p.296
- 福岡市教育委員会,2006,下月隈C遺跡VI—福岡空港周辺整備工事に伴う下月隈C遺跡第7次発掘調査  
報告一 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第881集—本文編一,福岡市教育委員会, p.284
- 藤下 典之,1984,出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法,古文化財の自然科学的研究,古文化財編集委員会編,同朋舎,638-654.
- 波田 善夫,1987,松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究—松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の擾乱とその動態についてー,資料集,日本自然保護協会,41-49.
- 林 弘也・松本 島,1980,瑞穂遺跡から出土した木製遺物の樹種同定,「瑞穂 福岡市比恵台地遺跡」,日本住宅公団九州支社,209-216.
- 金原 正明,1993,遺跡から出るベニバナ花粉,木下 正史・石上 英一 編 新版 古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法,角川書店,262.
- 南木 瞳彦,1991,栽培植物・古墳時代の研究 4 生産と流通 I,石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編,雄山閣,165-174.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,1999,樹種同定,「井相田D遺跡 第2次調査」,福岡市埋蔵文化財調査報告書第610集,福岡市教育委員会,143-149.
- 嶋倉 己三郎,1976,木材の材質、「板付 一市営住宅建設にともなう発掘調査報告書1971~1974ー」,福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集,福岡市教育委員会,67-75.
- 嶋倉 己三郎,1977,福岡市板付遺跡 H-5 地点から出土した木質品の樹種について,「板付周辺遺跡調査報告書(4)」,福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集,福岡市教育委員会,111-114.
- 嶋倉 己三郎,1981,福岡市板付 E-5・6 地区出土の木質遺物の樹種,「板付 板付会館建設に伴う発掘調査報告書」,福岡市埋蔵文化財調査報告書第73集,福岡市教育委員会,76-77.
- 嶋倉 己三郎,1984,木製遺物の樹種,「福岡市早良区田村遺跡 II」,福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集,福岡市教育委員会,33-69.

図版1 花粉化石



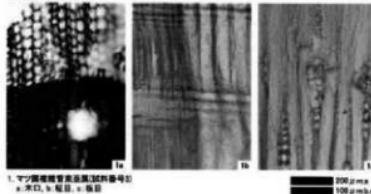
1. モミジ(試料番号1)
2. マツ(試料番号1)
3. コナラ(コナラ葉裏面)(試料番号1)
4. コナラ(コナラ葉裏面)(試料番号2)
5. クワ(試料番号1)
6. ハクモク(試料番号1)
7. クワ(試料番号2)
8. アカマツ(試料番号1)
9. ベニバナ(最近似種)(試料番号1)
10. ベニバナ(最近似種)(試料番号2)

図版2 種実遺体



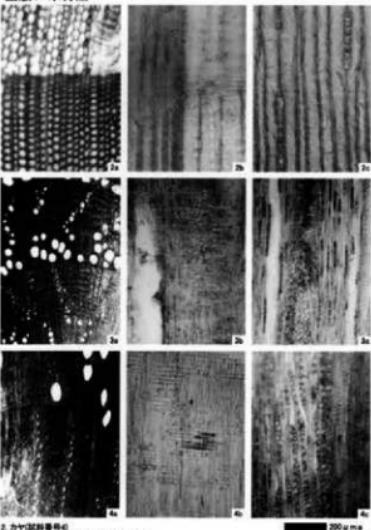
1. イヌマツ種子(試料番号1)
2. シイ種実(試料番号1)
3. シンシカツ種子(試料番号1)
4. ムクロツ種子(試料番号1)
5. ハクモク種子(試料番号1)
6. ハクモク種子(試料番号2)
7. カナムラガ種子(試料番号1)
8. パセリ科種子(試料番号1)
9. パセリ科種子(試料番号2)
10. メロン(無マウント)種子(試料番号1)
11. ヤマモモ種子(試料番号1)
12. ヒトウラン種子(試料番号1)

図版3 木材(1)



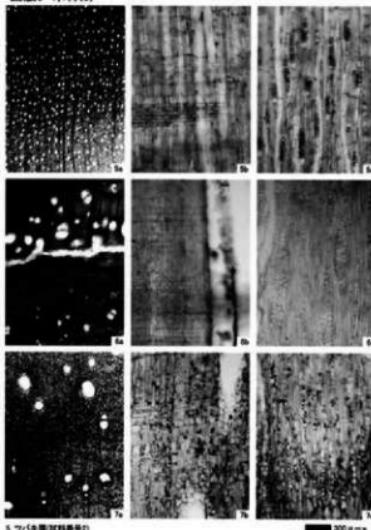
1. マツ(樹理管茎近傍)(試料番号1)
2. 木口, b: 番目, c: 番目

図版4 木材(2)



2. カヤ(試料番号1)
3. コナラ(コナラ形葉)(試料番号1)
4. ハクモク(試料番号1)
- a: 木口, b: 番目, c: 番目

図版5 木材(3)



1. ツバキ(試料番号1)
2. ムクロツ(試料番号1)
3. ハクモク(試料番号1)
4. ハクモク(試料番号2)
- a: 木口, b: 番目, c: 番目

報告書抄録

## 那珂 49

－那珂遺跡群第113次調査報告－  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第982集

2008年（平成20年3月17日）

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目8-1  
☎ (092) 711-4667

印刷 久野印刷株式会社  
福岡市博多区奈良原町3-1  
☎ (092) 362-5726



